

危機に遭うたび、技をいかして、技を守る

姫路城の北に「明珍火箸本舗」の看板が上がる工房がある。工房の窓辺で風に揺られ「チリーン、リーン」と透明感のある音色を響かせているのは、「明珍火箸風鈴」。明珍火箸風鈴とは、その名のとおり、火箸で音を奏でる風鈴だ。「明珍家はもともと甲冑師の家系ですが、鉄を鍛造してきれいな音を出すという技が代々、受け継がれてきたんです」と鍛冶師の明珍敬三さん。

明珍家の歴史は平安時代にまでさかのぼる。京都九条で甲冑師をしていた宗介紀ノ太郎が、近衛天皇に鎧、響を献上したところ「鎧が触れ合う音が朗々と明白で玉のように美しい。類いまれな珍器である」と称賛され、「明珍」の姓を賜ったという。戦国時代に入ると、拠点を京都から関東に移して活躍。武田信玄の肖像画でよく見かける、白い毛があしらわれた信玄愛用の「諏訪法性の兜」は、日本最高の甲冑師といわれた明珍信家の作だ。

江戸時代には、幕府の大名・酒井忠清のお抱え甲冑師となった。そして江戸中期、主君・酒井忠恭がお国替えて姫路藩主となると、明珍家も姫路に移り住むこととなる。「現在の姫路城西側に職人が従事する鍛冶場があつて、江戸末期まではそこで甲冑をつくっていました」

甲冑師として名をはせてきた明珍家。ところが、明治時代に入ると甲冑の需要はなくなり、廃業の危機に。そこで48代目・明珍百翁宗之は、甲冑の余技としてつくっていた、当時の生活必需品「火箸」に主力商品を転換。明珍火箸は、志賀直哉の『暗夜行路』に描かれるなど姫路の名産にもなった。

しかし昭和に入り、再び、時代に翻弄される。戦時中は原料の鉄や鍛冶道具まで供出したうえ、戦後は



明珍火箸風鈴製作者

明珍敬三さん



1976年生まれ。52代当主で父の宗理氏（むねなり）現代の名工に師事。氏が考案した明珍火箸風鈴をはじめ受け継いだ伝統の技日々進歩させている。「時代時代に合わない」と残っていないというのは「伝統工芸の永遠のテーマ。コソコソと積み重ねていく中で、次につながる新しい形の明珍家の言がふれたらと思っています」



平安時代から続く、伝統の技によってつくられる、明珍火箸風鈴。なお、かつて明珍家でつくられた甲冑や鐙（つば）などは戦時中に供出したため手元にはないが、約400点もの古文書が残っている。

写真右／涼やかな音色を奏でる、明珍火箸風鈴。「鳴り過ぎてもうるさいし、鳴らないと風鈴じゃない」（明珍さん）という言葉のとおり、夏の暑さを和らげてくれるなんとも心地よい響き。
写真右右／貴重な玉鋼の火箸風鈴。刀工の道に進んだ、兄・宗裕さんが鍛錬した玉鋼を使用。玉鋼の響きは、もう圧倒的。火箸がそっとすれ合うだけで、大きな波を描くような深い余韻が長く続く。
写真下左／チタン製の火箸風鈴。



明珍本舗
姫路市伊伝居上之町112
TEL 079-222-5751

甲冑師の祖先が生んだ美しい音色が、時代の変遷を経て、火箸風鈴に



トン、トン、トン……。美しい音色、響きを存分に引き出すように、気を抜くことなく、無心に、丁寧に鉄を打つ。しかも、焼けた鉄が冷めるまでの一瞬のうちに。打つ火箸の材質や、長さ、太さによっても打つ時の力加減、回数を変えながら、1日に1万回以上、錘を振る。
この後、火箸の頭（箸先と逆の部分）の形状をつくり、着色などを行う。さらに、触れ合った時にきれいな音が鳴るように火箸を2本もしくは4本を組み合わせる「音合わせ」をして、明珍火箸風鈴に仕上げる。

しだいに燃料が炭から電気やガスへ。火箸が売れない時代になったのだ。「どん底の時代。逼塞中の逼塞です」。そんな切羽詰まった中で、52代目当主で敬三さんの父である宗理さんが着目したのが、火箸が触れ合うときに出る「美しい音」だった。「明珍家には、近衛天皇にも称賛された、きれいな音を出す独自の鉄の鍛え方の技がある。これをいかして、どうにか火箸を音の世界に形を変えていけないかと考えたんです」。試行錯誤を経て昭和40年頃、「明珍火箸風鈴」は完成。本来、甲冑や火箸に必要ななかったはずの「美しい音」が明珍家の起死回生につながったのだ。

追求するのは、より美しい音色

ステイヴィー・ワンダーに「東洋の神秘の音色」と絶賛された、明珍火箸風鈴の音。鉄という物質が触れ合って音を出しているのに、なぜだか自然界で生まれた音のようにも感じられる。一度、音を発すると澄んだ余韻が長く続く。いつまでも聴いていたいような音。「科学的に調べると、揺らぎというか、人の心をリラックスさせる周波数がたくさん出ているそうです」

さて、明珍さんの仕事場で、人の心を魅了する火箸がどのようにつくられるのか見せてもらう。「今から鉄を焼いて打ちます。一瞬ですよ」と明珍さん。1300℃に熱せられたコークスの中に、長めのえんぴつほどの長さの鉄の棒を入れると、鉄の棒はオレンジに色を変えた。すかさず錘でトン、トン、トン、トン…と一定のリズムで打つ。その間、1〜2分。鉄の棒の先がすっと細く伸びて、箸の形状になった。ただし、このときの箸の断面は割り箸のような四角。「次に、この四角の角を打って八角形、十六角形と細かく形を変えながら丸い箸に仕上げます」。もう1度、鉄を焼いてトン、トン、トン、トン…。さらに焼いてトン、ト

ン、トン…。そうして火箸の形ができ上がった。

「単純に叩いていたんじゃないんです。明珍火箸の音が出るように狙って打っているんです」「形をつくるのは、2〜3年でできるようになります。けれど、音色、響きが出るようになるには10年くらいかかりました」。形ができて美しい音が出なければ、明珍火箸ではない。「どうすればいい音が出るのかというのは、私も当主から言葉で教わったわけではないんです。とにかく仕事をみて、あとは自分で叩いて叩いて会得するしかないんです」

伝統の技というのは、言葉を超えた次元で確実に引き継がれるようで、「当主と私がいっしょに仕事をしていると、叩くリズムが同じだ、といわれます。2人で仕事をしていても、ひとつの音にしか聞こえないって」「もしかするとそのリズムは甲冑をつくっていたころから、変わっていないのかもしれないね」鉄を打つという技をいかしながら、時代の変遷を生き抜いてきた明珍家だけに、新しいチャレンジも続いている。たとえば、日本古来の製法で鍛錬された純度の高い鉄、玉鋼を使った火箸風鈴。玉鋼は日本刀の材料に使われる貴重なもの。玉鋼の火箸風鈴は、専門家が「うなるような深い余韻」とも表現する、なんともすばらしい響きがある。また、チタンを使った「おりん」など火箸風鈴以外の作品にも力を入れ、さらには、チタン製の「響鉢」というオリジナルの楽器も生み出した。響鉢や火箸は、楽器としてミュージカルや現代音楽などのコンサートでもしばしば使用されている。

「追求していくのは、さらにいい音。850年を超える歴史をつないでくれたご先祖様への感謝と責任もありますから、ヘタな音は出せません。日々の仕事を丁寧に積み上げて、より美しい音をめざしていきます」